

「私にとってすれば、一晩のできごとでも、一生のことも、夢であったとしても、それが真実かどうかなんてわからないわ」

(映画『Eyes Wide Shut』 監督/スタンリー・キューブリック/1999)

画家は常に光を描いてきた。

光とは何か。光とは、質量はないが確実に実在する、当たり前前に享受していながら最もよく分からないもの。

そのよく分からないものによって現象を認識することを、「見る」という。

例えば、カメラを持つ。

被写体を決め、ピントを合わせる。

照準が合うと眼前に、くっきりと対象が顕現する。そこから離れるとまた色彩の珠となって分解され、消失していく。

フォーカシングを繰(く)る手を動かし、少しずつ少しずつ焦点が定まってくる、ものの輪郭がゆっくりと明晰になってゆく瞬間。また、深追いして焦点距離を越え、かたちが光景の中にじわりと融解していく瞬間。儚い世界の明滅は、恍惚となるほどに美しい。

視覚を支えているのが光である以上、絵画の手段とは光を捉えることに他ならない。

レンブラントとフェルメールは光の画家として比較されるが、二人が表現しようとしたのは実は同じものではないかと私には思えるのである。

レンブラントは光と闇の対比を強調し、絵画上の中心を定め焦点を絞っていく。対象を劇的に見せることで、人間存在の力強さや宗教的な神々しさを表現した。

フェルメールは、例えばシャボン玉の表面に映る光彩を描くように、色彩を最大限に操作しながら煌めく空間を描く。直射する(明暗を二分化する)光を好まず北窓から取り入れられた散乱光を採用し、柔らかく空間を照らす繊細な光の粒子が、均質に画面に注がれる。

一方は明晰化の、一方は融解作用の、寸前、その刹那。

彼らは、わたしたちが存在するフォーカス地点の、少し前(と後ろ)に立ち世界の不思議を「見る」「見せる」。対象をキャンバスに固定しドラマティックに演出することで、鑑賞者は「在る」ことに対する驚き、畏れ、感謝に至る。それほどに世界は移ろいやすいのだと、画家は知っているのだ。

「光」は英語において〈light=ライト〉と〈optics=オプティクス〉に分けられる。

lightはいわゆる「光」を意味し、opticsに対応するのは、「光学」「光学像」「光学器械」さらに一般的には「レンズ」とも言えるだろう。

前者は光の実体であり、後者は光を感じる主体に重心を置いている。

よく知られているものとして「カメラ・オブスクラ (camera obscura)」がある。ラテン語で「暗い部屋」を意味し、写真=カメラの原理となるものだが、ルネサンス期それは絵を描くための装置だった。

被写体に乱反射した光のうち、空間に設置したピンホールの一点を通る光線のみを選び出し、平面に投射することで結ばれた像をなぞり写生する、というものである。

「写真=カメラ」が発明されてのちは、対象を光学的に正確に写し取る職能が奪われ、画家たちは別のリアリティーを模索する。セザンヌはプロヴァンスで、サントピクトワール山の偉大さ〈light〉をいかなる捉え方〈optics〉で表現するか苦心することになる。

絵画とはつまり「見る」ことの増幅装置である。

絵画とは〈light〉と〈optics〉が相関して画面上に描き出す何か。世界を、通常よりも強く(脆く)、または違ったものとして感受するためのものである。

私は光そのものをみせる仕方を考えている。

「描く」ことが「光を捉える」と同義ならば、その方法に絵具は定義されていない。

私は写真印画紙に向かい、「光」を色彩として形として「記録」する。まっ暗い部屋のなか（camera obscura）で行うこの方法に〈photo brush＝フォトブラッシュ〉と名前をつけた。直訳すれば〈写真画法〉とでもなるだろうか。

「写真」というのは厄介な言葉で、体がないまるでお化けだ。紙でも布でもディスプレイ上でも、撮影された静止画として写ったものはすべて写真と呼ばれる。絵画のように確固たる支持体を持たないこのメディアは、任意の支持体を与えるとそこに憑依する。ゆえに発展し日常に浸透した。イメージこそが写真、と言える。レンブラントたちが捉えようとした幻のような世界を、軽やかに表しているのだ。

photographの語源はギリシア語で「光の記録」、これはそのまま絵画の方法論である。

キューブリックは遺作となった映画『Eyes Wide Shut』で、現実と夢想は同価値（この映画の場合、「同罪」）であるとした。

視覚においても私たちが捉えている世界は、眼球に写った〈イメージ〉の認識でしかなく「見えている」という点では〈幻（まぼろし）〉と変わらない。

光は、夢と現を同時に内包している。

私は光そのものをみせる仕方を考えている。

物質とイメージの間で立ち顕れる、その美しさを。

岡本 啓